

出会った人々 VI

7月3日 水曜 天気晴れ 暑い！

学期末のテストを終えて、遼寧省の省都、瀋陽への旅に出かけた。中国版新幹線「高铁」での往復、四日間の旅だ。

着いたその日の宿は、都心の中山公園の南にある「錦江イン」にとった。そこのフロントにいたのが、胡さんという若い女性。実はこの出会いが何か不思議な感じだった。それまで中国のホテルでは、大抵化粧は厚いが愛想の良いいかにも業界の人とおぼしきフロント嬢か、スーツをばちっと着込んだ短髪の男性職員に、応対をしてもらっていた。それが今回は、眼鏡姿の地味な感じの人で、まるで勉強熱心な女子大生ではと思う印象だった。

カードキーをもらい部屋に入って間もなく、その胡さんから内線電話がかかって来た。何か慌てている様子。中国語でぼそぼそと話す声が聞こえた。しかし、自分の語学力では十分な理解ができない。やがて英語でマネー、マネー!と叫ぶような声となった。それでわかった。彼女が支払いの請求を忘れていたのだ。この宿 2 泊分の予約は、いつものパソコンでのネット検索でしていた。しかし、その支払いは現地払いの設定にしていた。ホテル側からすれば、大抵の客は予めネットで決済を済ましてやって来る。私もそうした外国人客と判断していたのだろう。私が部屋に去った後、胡さんは相当慌てたに違いない。事態を理解した私が、直ぐにお金を持参しますと返事してフロントに降りた。2日分で330元とかを支払った。名札にはフロントの主任と表示されていた。ベテランがミスしたからだろう、しきりに恐縮していた。



ホテル近くの緑濃い中山公園で 公園ではよくダンスに興じる中年のグループに出くわした

7月4日 木曜 天気晴れ この日も暑い

部屋のカーテンを開けると夏の強烈な日差しが入って来た。寝起きがどうも悪い。9時前に1階奥の食堂に向かった。「錦江イン」はリーズナブルなビジネスホテル・チェーン。料理はビュッフェ形式で決して豊富とは言えなかったが、小籠包などの蒸し物に、西洋人向けのトーストなど一応は揃っていた。中国の旅で不思議に思うのは、こうしたホテルの食堂で場に相応しくない作業員姿のおじさんに出会うこと。このホテルには給仕の女性もいたのだから、このおじさんとどういう役割分担をしていたかはよく分からなかった。それなりのユニフォームを来た女性サービス員との差は歴然としていた。ところで、何年か前の中国・杭州の旅で泊まったホテルでは、申し訳ないがむさくしい作業着姿のおじさんが、給仕を一人でこなしていた。昔からの習わしなのだろうが、せめてスーツでも着させて対応させても良いのではと思ってしまう。

この日、皇帝陵や繁華街「中街」に出かけたりしたが、夕刻宿に戻るとフロントには昨日の胡さんが仕事に就いていた。そこで、部屋に戻ってから電話して少し後からフロントにおり、おしゃべりのお相手をお願いする。しかし、まだ筆談が多くて困る。しかしこれが面白かった。そもそも私が胡さんに親しみを覚えたのは、眼鏡をかけまるで女子大生のような雰囲気の人がホテルマンをしていたからだ。私が遼寧師範大学に留学していると話す、私は地元の瀋陽師範大学出です、とのこと。この遼寧の北部の農村から大学生になるため出てきて、卒業後ずっとこのホテルの仕事をして来たそうだ。7年半になるという。旅行は好きですか？と向けると、興味ないと答える。そう旅行が好きだったらホテル業は合わないかもしれぬと思った。また忙しくて、行く暇もなかったかもしれぬ。

恋人ははいますか？と聞くと、イエスと答える。こちらもそりゃ当然でしょと応答。来年には結婚するそうだ。そして仕事はその後は続けないとのこと。三十歳を境にこの仕事を辞めるのだと。彼氏は不動産関係の仕事に従事しているとか。随分率直なもの言いだが、とにかく仕事はきついそうだ。明日は別のシフトで、毎日が不規則な点も応えるという。この夜は翌朝までフロントに立つと言う。玄関は24時間開いているそうで、こうして話している時にも客と仕事関係の出入りがかなりあった。朝食の時に見かけた、あのむさ苦しいおじさんもフロントに荷物を届けに来ていた。それを受け取った「女子大生！」が何か指示を与えていた。辞書代わりに持ってきた手机(スマホのこと)の電池が切れたところで、おやすみなさいを言い、部屋へと退いた。丁度12時前だった。

自分の中国語は気づかぬうちに、少しは上達していたのかもしれない。英語も殆ど話さない現地の人と、一応中国語での会話が成り立ったわけだから。この半年間の成果が少しは実った瞬間だった・・・。